

資料

発見物

「道具倉より発見された祈祷札箱と板絵図」

一年号を示す墨書と建物の図面一

道具倉より発見された祈祷札箱と板絵図

一年号を示す墨書と建物の図面一

本保存活用計画策定に際して現地調査を行ったところ、道具倉2階より祈祷札箱と板絵図が発見された。祈祷札箱は、西面北より第一間の柱と東面南より第一間の柱にあり、柱に打ち付けた釘に祈祷札を掛けていた。また、板絵図は南より二通り目の登梁西側の桁との取り合い部分に据え置かれた状態で発見された。

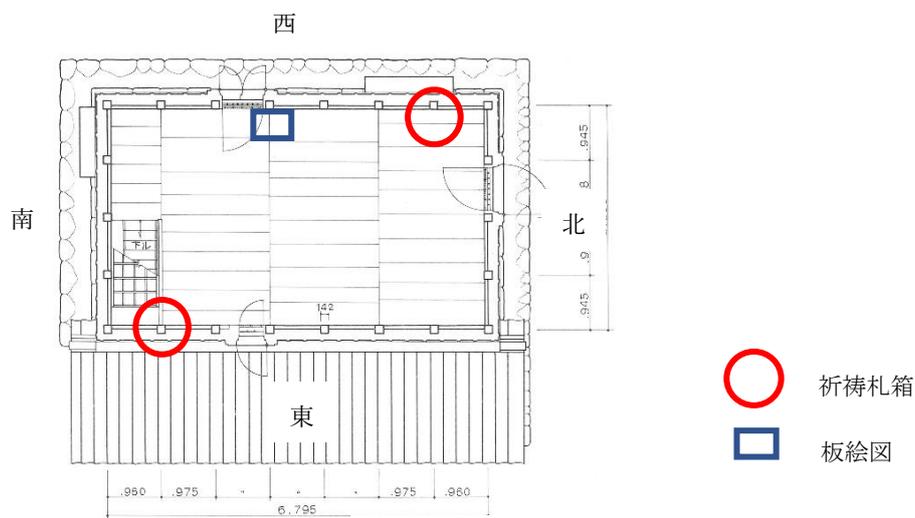


図1 祈祷札箱と板絵図の配置



写真1 祈祷札箱の状況（南東より見る）



写真2 祈祷札箱の状況（北西より見る）

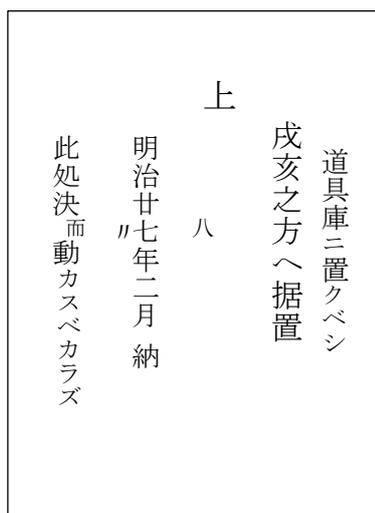


写真3 祈祷札箱の詳細（北西）



写真4 板絵図の状況

I. 祈禱札箱の年号を示す墨書



※ 〃は抹消を示す



写真5 北西の祈禱札箱裏面墨書

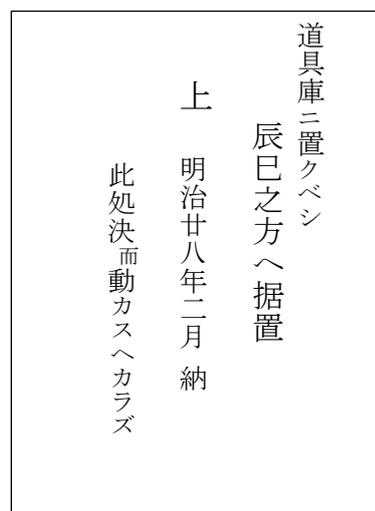


写真6 南西の祈禱札箱裏面墨書

II. 板絵図の内容

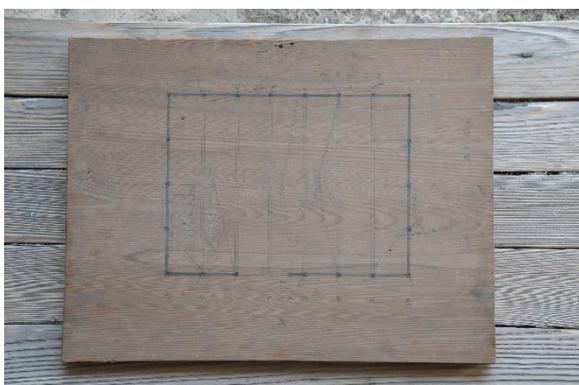


写真7 板絵図 上面



写真8 板絵図 下面

板絵図には、表裏の両面に同規模の平面図が描かれていた。柱の断面や壁を太い墨塗とし、横架材など構造材の見え掛りを細い墨線としていた。上面の図面は方角、柱番付、平面規模、階段、開口部の開き勝手にわたり、比較的詳細な情報が描かれているのに対して、下面の図面は柱、横架材の表現にとどまっていた。

Ⅲ. 考 察

〈 祈祷札箱 〉

写真5・6より、「道具庫ニ置クベシ」とあり、現在の「道具倉」とは呼称が異なるものの、固有の建造物を指している点で資料的価値が高いと考えられる。また、「戌亥＝北西」「辰巳＝南東」の方角も、現在取り付けられた箇所と合致することから、現存する道具倉に取り付けるために製作されたものと解釈しても差し支えないだろう。

なお、祈祷札箱を掛ける釘の打ち替えはないとみられ、祈祷札箱が柱に取り付いた面は、その周辺と比較して材面の焼けが見られず、新材を仕上げた面がそのまま保存されたような状態であったため、現在に至るまで一度も動かされていないものと推定される。

墨書が示す年号は、両者とも明治 28(1895)年としており、少なくともこの札箱が取り付けられた時期に道具倉が建築中もしくは竣工していたと考えられる。道具倉は、これまで敷地内の建物で一番新しいとされ、建築年代が不明であったが、今回の札箱墨書の発見により、間接的であるにしても、建築年代を推定できる点で貴重である。

仮に、明治 28 年に道具倉が竣工していたとすると、米倉の明治 26 年竣工から 2 年後となり、同じく絵図に描かれた道具倉も明治 26 年時点で計画があり、米倉と連続的に建てられたものと推定される。

〈 板絵図 〉

上面の板絵図には、建物の規模を桁行三間半、梁間二間とし、正面入口が東面であることが記されている。また、建物の各隅部に火打材、南東隅部に階段、登梁を桁行方向四間割に配置、二階床梁を各柱通りに描いており、現状の道具倉の構造と方角が合致していることから、板絵図が示す建物が、現存する道具倉であることは間違いない。下面は情報が少ないものの、上面の図面と同一の平面構成があり、南北妻側半間に受梁と思われる部材が描かれていることから、1 階見上図とも解釈できるだろう。

残念ながら、この板絵図に年号を示す墨書は発見されなかったため、どの時代に作図されたものかは不明で、描かれた図面が「計画図」「竣工図」または「現状図」のいずれなのかは判然としないが、墨指しや筆が用いられている点や記号などの表現などから、道具倉の構造を良く知る大工によって作図された可能性が高いと考えられる。また、北東隅柱を「いの壺」とする番付があることから、将来的に解体を伴う修理が行われた際に同様の番付が部材から発見されれば、明治 28 年頃と推定される建築年代に比較的近い時期に製作されたものと判断できるかもしれない。